

新しい辞書を手にして

『三省堂国語辞典』編集幹事

市川 孝

新しいことばを求めて——用例採集

現代語の辞書の内容を手落ちなく改訂するためには、増補すべき新語を選定したり、新しい意味・用法を追加したりする必要があり、そのために何よりも重要なことは、実際に使われている語の用例を数多く採集することである。用例採集のことを「ワードハンティング」（和製英語）とも言う。

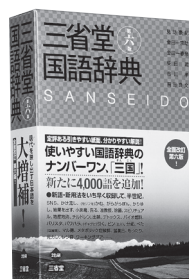
『三省堂国語辞典』の、言わば生みの親とも言うべき見坊豪紀氏（一九九二年に逝去）は、新聞・週刊誌・放送などからの用例採集を、一日も欠かさず続けてきた。その作業は、五十年にも及び、用例カードは百四十五万枚に達した。それを元にして、この辞書のそれぞれの改訂版に、毎回、数千もの新規項目を

加えてきた。この辞書は、小型辞書であるにもかかわらず、大型辞書をしのぐほどの新語や新語義を収録して、「生きのよい現代語辞典」として世間に評価されてきたのである。その伝統は現在も引きつがれている。

見坊氏の観察によれば、ことばは常に音もなく変化していき、一日当たり三つの新語が生まれる計算だという。このような状況に対処して、新語や新語義を追い求めるためには、見坊氏のような人のいない現在、多くの人の関与が必要となる。

三省堂には、すでに辞書改訂のための新語データベースがあり、今回の第六版の編集では、その新語データベースを多く利用した。さらに、編者や編集部それぞれの見地から採集した多数の用語・用例を活用した。筆者

今回の辞書



『三省堂国語辞典 第六版』
三省堂／2008年

も、及ばずながら、長い間、新語や新語義の採集を行ってきた。筆者の場合、主として新聞一紙を毎日約四時間かけて精読する方法をとった。そのほか、週刊誌・月刊誌・テレビ放送などからも、多くの用語・用例を採集した。

辞書への収録

新聞などを読んでいて、知らない新しいことばに出くわすことがある。新しく使われることばにはカタカナ語が多い。とりわけ英語が多く流入し、訳されることもなく、そのまま新しいカタカナ語として取り込まれたりする。また、制度の改革、各種研究の進展、物の考え方の変化などに伴って、新語が次から次へと生まれてくる。

このような多数のカタカナ語や新語のう

ち、現代人にとって必要不可欠なものは、是非とも辞書に収録する必要がある。それらが新規収録語の中核をなす。第六版所収の例をいくつか挙げてみよう。(順不同)

ポピュリズム／ハザード マップ／ワーキングプア／トリアージ／ワークライフ バランス／メタン ハイドレート／中等教育学校／准教授／第二新卒／猛暑日／脂質異常症／地産地消／特区／メタボ イオ燃料／発光ダイオード／法テラス

若者ことばや俗語の収録もゆるがせにできない。若者ことばや俗語は多種多様であるが、その中で定着しそうなものを選択する必要がある。例えば、

逆ギレ／むずい／パニクる／つゆだく 駅ナカ／目ぢから／ていうか／キャラなどは収録されたが、「KY」(空気が読めない)などは、一過性の流行と考えて、収録は見送られた。

なお、この辞書の第五版・第六版では、外国人留学生の読者を想定して、外国人にとって理解がむずかしいとされる擬声語・擬態語を多数収録した。

第六版では、新規収録語とは別に、今までの収録語について、その語釈を修正・改善したり、用例を加えたり、新しい語義を補充収

録したりした箇所がきわめて多い。例えば、「かむ(噛む)」の項に、従来の語釈にはなかった、次の語釈・用例を加えた。

②(「舌をかむ」ことばがつかえたり、言いまわしがえたりする。「何度も」)

「エンジン」の語釈は、従来は「発動機」としかなかったものを、次のように詳しくした。

①内燃機関。②原動機。「―をかける」③コンピュータで「データ処理を実行する」。④原動力。「地方分権の―」

辞書に親しむ

筆者の中学生時代、地理のたいへんよく出来る級友がいたが、彼は昼食の弁当を広げながらも、いつも地図帳をかたわらに開いて、楽しそうに眺めていた。

長年、国語辞典の編集・執筆にたずさわってきて、「辞書は地図帳に似ている。」などと考えることがある。

辞書は、限られたスペースに大量の見出し語・語釈その他を載せている。ページ当たりの情報量の多さでは、辞書の右に出る本はあるまい。地図帳も、そのページ当たりの情報量の多さにおいて、辞書に引けを取らない。そう考えれば、辞書も地図帳も安いものだ。

辞書は多くの場合、ことばの意味・用法を

知るとか、書きあらわし方を調べるとかいうような、実用上の必要があつて引くものだが、それだけではなく、いつも手近に置いて、気の向くままに引いてみるのもおもしろい。ことばの森に分け入って、そこに並んでいる、さまざまな語句たちと対面すれば、それだけ自分自身のことばの世界が開け、語句や漢字に対する能力や感覚が育ち、語彙も豊かになるにちがいない。地図帳も、普通、必要があつて利用するものだが、暇なとき、気楽に地図帳を広げること、いろいろな地域の情報を仕入れ、また、まだ見ぬ土地に遊ぶことができる。

ことばは時代とともに変化し、新しい語が次々に生まれ、表記もしばしば改められる。辞書はやはり新しいものを用意する必要がある。新しい都市や道路や鉄道の載った地図帳が必要であるように。

「新しい辞典を買うと心が豊かになるのを感じる。」と言った人がいる。新しい辞書を手にして、それを友とし、親しむことによつて、心も豊かになるであろう。

いちかわ たかし 一九二七年、長野県生まれ。東京大学文学部国文学科卒業。国語学を専攻。国立国語研究所員、お茶の水女子大学教授を経て、現在、同大学名誉教授。